

島根を小走り！輝く理学療法士紹介 第1回 Stroke Care Unit での日々



佐々木 翔太（ささき しょうた）先生
島根大学医学部附属病院
リハビリテーション部



松本 拓也
島根県理学療法士会広報部 部長

【Guest Speaker 紹介】

2017年に県立広島大学保健福祉学部理学療法学科を卒業。同年に島根大学医学部附属病院に入職。2022年に島根大学大学院医学系研究科修士課程修了。臨床では、主に神経系理学療法を担当する中、全診療科の理学療法に関わっている。2021年よりStroke care Unit（以下：SCU）の専任理学療法士として勤務。取得資格：認定理学療法士（脳卒中、物理療法）、三学会合同呼吸療法認定士、LSVT 認定セラピスト、骨粗鬆症マネージャー

01 はじめに

松本 今日は島根大学医学部附属病院の佐々木先生に大学の病院のSCUについて色々お聞きしていきます。簡単に自己紹介をお願いします。

佐々木 島根大学医学部附属病院で理学療法士をしており、佐々木翔太と申します。出身は島根県の江津市で、大学は県立広島大学という大学を出ましてそこからこの大学病院へ入職しました。

松本 このSCUの話をする前に、佐々木さんが今までどんな患者さんを対象として臨床してきたか、またどんな分野に興味を持っているか、お話しいただけますか？

佐々木 興味を持っていた分野は主にSCUを担当する前から脳卒中の診療かつ神経変性疾患であるとか神経系に何かしらの問題を抱えていらっしゃる方の診療に従事することが結構多いと思っています。
松本 神経系に興味を持った

理由を教えてください。

佐々木 今までの経験を振り返ると大学三年生の時の評価実習で脳卒中左片麻痺の方を担当し、pusher症候群が強く出ていた方をケースとして担当しました。その時に何でこんな現象が起こるんだろうなっていうのを凄く調べたけれども分からなくて、実習が終わった後に大学の先生に聞きました。その時「こういうメカニズムって言われてるよ」みたいな話からより興味が強まったというところが、脳卒中の分野というか脳の仕組みにすごく興味を持ちました。その後の実習でも、脳卒中の患者さんには深く関わらせていただきました。そこから入職の時に就職試験の時に作文があったのですけれども、そこでどんな理学療法士になりたいかみたいな欄に、脳卒中の認定理学療法士を取るとか、既に書いていたので、学生時代から脳とか中枢神経系には興味があったのだなと思って

います。

松本 学生の実習の印象ってすごいインパクトがありますよね。そういったところが経験としてつながって、さらにもっともったいいものをという風につながっていく感じですね。今日はとてもいい話が聞けました。本当にありがとうございます。

02 SCUでの活動

松本 そういった診療の中で課題も感じつつ脳卒中センター、SCUに関わるようになって

たと思うのですが、まず簡単にこのSCUや脳卒中センター立ち上げのきっかけなど分ければ教えて下さい。

佐々木 患者さんにとって例えば死亡率の減少ですとか在院日数の短縮やADL、QOLの向上っていうものがエビデンスで示されています。ガイドライン上にも明示されている施設、SCUというのが明記されています。このようなメリットを勘案して当院でも立ち上げていこうという流れになったと思っています。立ち上げ際の、中心メンバーとな

って教授をお招きして今運用しているという流れになりました。

松本 実際に稼働するにあたっては佐々木さんもどういった風にしていけばよいかという話し合いには参加されましたね。

佐々木 そうですね。二〇二一年十月からSCUが三床で仮運用していますけど、その前の段階からSCU立ち上げに向けた運営会議にも参加させていだいて、どのように運営していくかというところには関わっていました。

松本 実際に全国にSCUが約百五十施設ありますが、参考にした病院はありますか？
佐々木 立ち上げの二・三か月前に藤田医科大学病院ですとか高知大学病院、長崎大学病院にオンラインで情報交換をさせていただいて、どのような形で運営しているのかというのを伺い、それを参考にして今運用しています。

松本 実際にSCUの専任になろうと思ったきっかけはあ



りますか？

佐々木 最初はSCUの動きがあるっていうのを聞いた時に少し急性期過ぎて、もっと回復していく段階をサポートしたいという思いを持っていました。その思いもあってSCUの中心になるっていうのは少し敬遠していた部分があったんです。けれども、色々調べていった中で、ここでの運用含めて考えていくと、そこだけじゃなくてSCUを中心としながら、SCUをまた方のサポートにも関わっていかってきただっていうところが分

私がSCUでやっていこうと決意したきっかけの一つにはなります。

松本 実際に二〇二一年の十月から稼働していますが、やっている感じが、実績として変わってきたことがあれば教えて下さい。

佐々木 三か月経って、データを少しずつ振り返りながら分析していますが、その中では離床の速さは圧倒的に早くなっている、端座位を開始する、立位を開始する、歩行を開始するまでの日数は明らかに早くなっているのが分かります。他のものに関しては、もう少し分析してみないと分からないという部分もあるのでそこはこれから課題になっています。最終的にはより良い状況、例えばGMSが少し高い状態で回復期にいける、歩行の自立度ができるだけ高い状態で回復期にいけるとか、改善度が高い、そういったところがちゃんとできているかというところを示していけたらいいなと思っています。



松本 ここに入院される患者さんの転帰はどうですか？

佐々木 ここで正確なことが言えないですけども、SOCに入院されている患者さんで限定すれば当初は軽症な人、自宅退院されるような方も入っていました、だんだん対象が絞られていって回復期に行くような方が中心となって入院しています。

03 今後への思い

松本 そういったところSOCの理学療法を進めていく中で、佐々木さんがSOCに関わって四カ月、やりがいを感じる所を是非教えてほしいです。

佐々木 やりがいで一番感じるところは看護師さんとの連携が一番やりがいを感じていて、中々一般病棟だと少し看護業務の体制としても七対一看護っていう状況があつてなかなかリハビリテーションっていうような意識を持って看護業務に取り組むっていうことはすごく難しさがある事で

はあると思います。ですが、SOCだと三対一看護でかつ脳卒中リハビリテーション認定看護師さんもおられて凄く看護師さんとの連携がスムーズに図れるので私たちが関わっている以外の時間のマネジメントがすごくやりやすくて、それが効果にもつながりやすいと思っています。もちろん手厚く、例えば理学療法の単位数が多くとれるといったところももちろんあるんですけど、やっぱり今セラピストが介入できる時間というのは私も限られているので看護師さんも含めての関わりのおかげで、より効果が高くなっていると思っています。

松本 そういった臨床を通じて佐々木さん自身が成長したなっていう部分はどんなところですか？

佐々木 成長したなと思うところは他職種、医師も含め看護師も含め、他職種の感じることや考えることに敏感になって、「こういうことを考えながら臨床しているのだな」っ

ていうのがより鮮明に分かるようになってきたというところが成長ポイントで、それが分かることによって僕たちがどういう風に看護業務の中にリハビリテーションの要素を組み込んでいってもらえそうか、みたいなところも分かってきました。そんなところが成長ポイントかなと思います。

松本 今後佐々木さん自身が、こういった「コ」になりたいとか描いておられますか？

佐々木 島根県にSOCがはじめてできて、第一号のステップっていう形になっていますが、全国に百五十施設ある中で、各地域性もあるので、島根大学病院ならではの

SOCを全国に発信できていような理学療法士になれたらいいなとぼんやりと思いついていてところです

佐々木 ありがとうございます。

コラム

広報部のつぶやき

なぜこの企画をはじめたかという、島根県内で働いている理学療法士のことを県士会内の皆様に伝えることで、横のつながりができないかと考えました。「こんなことで悩んでいる」そんなときに「そういう分野に詳しいな」という風に連絡が取れたりすると素敵だなと思っています。

初回のゲストスピーカーが佐々木さんで、職場の後輩ということもあり緊張しないと思っていました。実際始まると声が出ないこと、出ないこと。音声を収録していた広報部員も「二人ともお通夜のよいうな声だった」とお互い緊張

していたようです。広報部一同これからも県士会内の情報をしっかり伝えていこうと思っています。

ゲストスピーカー：佐々木翔太

Mail: sort.lake7@gmail.com

【広報誌に関する問い合わせ】

島根県理学療法士会 広報部

Mail: spta.information@gmail.com

